日刊 動労千葉
79.8.14
No. 197
国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二－八（動力車会館）
（鉄電）二二五八～九・（公衆）〇四七二（22）七二〇七

動労第35回全国大会

12地本代議員「千葉問題」で全面修正動議提出！

動労大改革へ、全国的総決起を開始！

八月七日から熊本市において開催されていた、動労第三五回全国大会は、十一日閉会された。まさに惨たんたる情況を内外に露呈し、動労本部を私物化する革マル反動集団の未来を暗示するような大会であった。

革マル反動分子及びこれに追ずいする一部反動分子は、全国大会をなんとかシャンシャン大会に終らそうという目論見に出てきたが、動労の民主的改革を求める全国の良心的役員・活動家の決起の中で、その意図は崩れ、動労大改革運動はまたひとつ大きく前進した。

第三五回全国大会は、「路線上の右傾化と表裏一体をなす、機関運営、規約無視のセクト的、暴力的動労引きまわし」というこの間の動労千葉の一貫した主張の正義性を明白に立証したのである。

総評槇枝議長の痛烈な批判！

大会は、初日から荒れ模様を呈していた。

冒頭、林委員長は挨拶の中で三五万人体制を目指す国鉄合理化、とりわけ、今日直面している55・10ダイヤ改悪、国鉄再建攻撃に対し、「貨物安定宣言賛美」どころか、動労の闘いの基本軸であった合理化絶対反対路線を踏みにじり、「現実的対応」とか、「柔軟路線」などの言動をもって、闘争放棄路線を真正面から打ち出してきた。

また、来賓として挨拶した総評・槇枝議長は、「千葉問題は、敵対矛盾ではなく内部矛盾」「労働組合はイデオロギー過剰になると分裂する。」と痛烈に動労「本部」批判を行ない、続いて全交運・吉岡議長も今日世間を騒がせている千葉のトラ狩り（鹿野山）騒動を引きあいに「一匹の虎を射殺してしまったというのは極めて残念だ。二匹目の虎はもとの檻にもどすべきではないか」と皮肉たっぷりに述べ、見せかけの沈黙をきめこんでいた革マル反動分子も思わずその本性を現わし、傍聴席から両者への激しいヤジをとばすというありさまであった。

「千葉問題」方針に全面修正動議提出！

大会四日目、反合理化、組織統一を中心とする運動方針について論議が戦わされ、千葉問題に関して、反動革マル分子が職場討議に付すこともできなかった「別冊方針」に対し、十二地本の代議員より全面修正動議が出された。

一〇五臨中に示された、動労大改革運動の前進は、このようにして全国の闘う仲間の決起を公然と生み出したのである。

修正動議をめぐって激しい白熱した討論が行なわれ、延々五時間、動議提出者は全員ゆずらず、収拾がつかなくなるところまで追いこまれた反動・革マル分子は、採決に応ぜざるをえなかった。

良心的中執、抗議の総退陣！

大会最終日、役員選出に入ったが、良心的中執はこの間の千葉問題、さらには動労の神髄ともいえる、反合理化路線を転換、より鮮明になった合理化屈服路線、セクト的引きまわしに対し、怒りと抗議の意志を明らかにし、総退陣を決意した。

暗雲をつきやぶるこの決起は、傍若無人な革マル反動集団への痛打となり、「新執行部」は成立せず、副委員長を含め中執四名欠員のまま、「片肺飛行」で動き出すという、まさに前代未聞のボロボロ飛行となったのである。

この事態は、正義と不正義とをはっきり示すものであり、動労大改革の道はますます鮮明に切り拓かれたのである。

各紙が報道する 動労第35回大会の模様

毎日（8/11）

柔軟方針を採択
動労、反合闘争を転換

東京（8/11）

『動労千葉』で紛糾
動労 四人空席のまま出発

朝日（8/11）

"片肺"執行部決まる

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉砕せよ！